

『ピラミッド 巨大な王墓建設の謎を解く』を読む

小野房 和音

私は『ピラミッド 巨大な王墓建設の謎を解く』を読んだ。これはエジプトに現在残っているいくつかのピラミッドや神殿の遺跡に基づき、ピラミッドの建設について書かれたものである。

紀元前 2470 年に上下エジプトの新しい国王は即位直後に知り合いの建築家にピラミッドの設計を命じる。ピラミッドの設計図が制作されると様々な職人が集い、建設が進んでゆく。まずピラミッドの土台となる岩肌をむき出しにし、北の方向を正しく決定した。ピラミッドの敷地を水平にするのと同進行で墓室への通路の作業が開始された。1 年弱をかけて敷地が水平にされ、多くの石が定められた位置の近くに置かれた。そして 1 層ずつ石が置かれていった。1 層目は石を地面に置くだけで良かったが、2 層目以降は石を持ち上げる必要があった。この本では、粗石積み斜道を作ることで石を上まで運んだとされている。斜道のは四隅から始められ、それぞれの層が完了すると斜道は延長された。石材は橇に乗せられ、斜道を通った。建設開始から 26 年が経ち、124 層の全てに石が置かれ、頂上石も置かれた。これによりピラミッドの建造が事実上完了した。その後、斜道は上から順にとり壊された。取り壊すと同時に石の段々をのみで削り、あとからすりみがあった。頂上石を置いた頃には、ピラミッド前の神殿と参道の建設も進んでいた。ピラミッドの斜道の取り壊しが終わった後、参道と神殿の建設が完了し、全ての工程が無事終えられた。国王が亡くなると遺体をミイラにし、神殿で儀式を行い、ピラミッドの中の玄室へ運ばれた。玄室の扉が閉じられ、王はピラミッドの中で眠った。

本の中で印象に残った部分がある。一つは、国王は死後の世界で永遠に続く生活を始めるための準備を即位 2 年たたないうちに始めたという事である。ピラミッドの建設期間は 26 年ほどであり、最後の仕上げの段階で国王は亡くなっている。つまり、30 年弱即位したにも関わらず、即位後 2 年弱でピラミッドの建設を命じている。これは国王が建設の期間と自分の残された時間を把握していたという事、現在とは「死」の捉え方が異なるという事が考えられるのではないだろうか。実際、この時代の王族の平均寿命は 35 歳前後とされ、早い段階で自分の墓について考える必要があったのかもしれない。また、死後の世界でも生きるということを強く信じており、死後も王として君臨するための準備をするという意味合いもあったと思われる。現在の我々にはない感覚であり、死を一つの人生の通過点のようにしかとらえていないことが窺える。

また、様々な分野の職人が建設に当たって集められたという記述もある。その職人は、石切り、測量、石工、モルタル、大工などがある。ここから分かることは、当時は建設技術はかなり進んでおり、頑丈な建造物を作ることに精通していた時代と考えることができる。また、それぞれの部署に分かれて作業を行うということはこの時代から行っており、長い年月がかかるとはいえ非常に効率よく作業をしていた可能性があるのではないだろうか。さらに驚くことは、ピラミッドが奴隷によって作られたものではないという可能性があることだ。本の中にも「人足の給料はすべて食料や衣類で持って支払われました。」(13 ページ 8 行目)

とあるように、しっかりと労働者として扱われており、建設に当たっては現在の労働環境とあまり変わらないことを示唆している。パン、野菜、牛肉、ビールなどが報酬として与えられていたことが発掘調査により明らかになっている。

ピラミッドはこのように単純だが、体力と労力が必要で、長年にわたって地道な作業を続けていたことにより完成したことが分かる。ピラミッドは現在でも残っているが、紀元前2000年代に作られた建造物がこうして残っているというのは凄いことだと思う。それだけ建設技術が今と同じぐらい優れていたという事でもあるし、この建設にかけた熱量が大きかったという事でもあると言える。また、この一大事業を成し遂げるために建設を行う人のモチベーションを保ち続けたことも特筆すべきことである。その上、エジプトにはピラミッドが複数存在する。そのようなことをいくつも成し遂げてしまった古代エジプトの人々の力強さといずれも正確である執念深さには圧倒された。

参考文献、サイト

ピラミッド 巨大な王墓建設の謎を解く。

デビッド・マコーレイ 1979年3月9日 岩波書店。

歴史人「ピラミッドは奴隷につくらせた。」はウソだった！？ 大城道則

<http://www.rekishijin.com/28379> (2023年9月8日閲覧)